様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７７０３１０

研究課題名（和文）津波常習地の災害文化に関する歴史人類学的研究

研究課題名（英文）A historical anthropology of disaster culture in tsunami-prone communities in Japan

研究代表者
木村　周平（KIMURA, Shuhei）

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：１０５１２２４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、岩手県大船渡市三陸町で複数回行った、昭和三陸津波から東日本大震災復興のあいだの地域の変遷についての現地調査に基づき、「津波てんでんこ」に代表されるような「災害文化」と言われているものの内実を詳細に明らかにした。人類学の分野では「文化」と呼ばれるものの曖昧さ、複雑さに関しては半ば常識になっているが、そこで実際に何が起き、様々な要素がどう関わり合っているかを明らかにした点が、本研究の成果である。

研究成果の概要（英文）：In this study I conducted field research several times on the change of communities since the Showa Sanriku Tsunami (1933) at Sanriku-cho, Ofunato City, Iwate Prefecture, where it is said that local communities maintain "disaster culture." Without using an easy label of "disaster culture," I provided different patterns of the local disaster preparedness (and unpreparedness). Elucidating the historical change of local communities before the East Japan Great Earthquake (2011), I examined what so-called "disaster culture" is.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学　災害文化　歴史人類学　津波

１．研究開始当初の背景

本研究は以下の 3 つの背景をもつ。

（1）災害の人類学

文化人類学における災害研究で中心的な課題となったのは、ある地域やそこに住む人々の「脆弱性」（vulnerability）および「対応力」（resilience）を、地域の文脈に基づいて理解することであった。この流れのなかで、災害に対応する文化的実践やローカルな知識についての、長期的な現地調査に基づく研究が蓄積されてきた。しかし、住民の実践に注目するあまり、政策や制度の利用、あるいは行政等との連携ついて、十分に注意が払われていない。

（2）災害文化論

2000 年代以降、国内外の防災政策においてキーワード化した「災害文化」だが、以前から災害社会学において論じられていた概念である。しかし、①この両者が十分に関係づけられていないこと、②前者での文化の習得あるいは学習のモデルが単純な「刺激－反応」型が多く、継承における阻害など分析が十分行われていないこと、さらに③災害に関する語りや伝承の存在がどの程度行動と結びついているかが十分に分析されていないこと、などの課題を残している。現代的な情報ツールをどう「文化」のなかにとり込んでいくかも含め、具体的な現地調査を通じて深められるべき論点は少なくない。

（3）津波常習地のヒストリオグラフィ

三陸沿岸は山口弥一郎や山下文男らの民俗学者・地理学者・歴史家等によって実際の災害の経験や復興のプロセスが記録されてきた地域であり、被災の記録と記憶に関する資料的な厚みは他の地域と比べ豊富である。しかし、そこでは災害やその直後に何が起きたのかは詳細に描かれているが、それ以外の時期にどのような社会的変化が起きたかは十分に記述されておらず、また、この地域を取り巻くマクロな政治経済的状況（戦後の国土開発等）との関連付けも十分ではない。

２．研究の目的

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災を一つの契機として、防災研究や実務において「災害文化」形成の重要性が強調されながらも、この概念自体についての議論が十分になされていない。

こうしたことから、本研究は、地域の災害対応のあり方を重層的な社会的コンテクストのなかで捉え直すこと、それを通じて「災害文化」という概念について検討することを目的として設定する。

より具体的には、「津波常習（襲）地」と呼ばれる地域の集落を事例に、地域を取り巻く政治経済的な構造、地域におけるすまい・生業・組織、そして人びとの記憶や情報の伝承という 3 つのレベルの変遷の相互関係を、聞き取りと一次・二次資料の分析を通じて明らかにし、それを通じて、災害文化をどう位置づけるべきかの見解を示す。

３．研究の方法

本研究では、本務校を拠点とする文献研究に基づく「災害文化」概念の理論的検討と同時に、岩手県大船渡市の 2 つの地区（大船渡町および三陸町綾里）を対象として、東日本大震災後の災害対応と、それを導いた、それまでの社会の変容に関して現地調査を行った。

そこでは、震災後から繰り返し現地を訪問し、支援活動を行うこと通じて関係を形成した人々を中心に、時間をかけて聞き取りを行うと共に、現地図書館や公民館等での資料収集を行った。

主要な現地調査は、2013 年 8 月、2014 年 3 月、2014 年 8 月、2015 年 3 月、2015 年 7 月、8 月、2016 年 3 月に行った、それぞれ数日～10 日程度の調査である。それ以外にも日帰りで聞き取りや行事の観察等も 10 回程度行った。なお、現地調査のコーディネートについては、綾里地区の復興委員会の方々にお世話になった。また、調査においては、震災後に協働で活動している首都大学東京の饗庭伸准教授の研究室、常葉大学の池田浩敬教授の研究室、明治大学の青井哲人准教授の研究室、および東京大学の岡村健太郎助教らと合同で行うこともあった。

具体的な調査項目は以下の通りである。

(1)「災害文化」に関する理論的検討

（2）昭和三陸地震から東日本大震災までの地域の変化

①過去の災害の記憶・記録の維持

②地域の変容

(3) 東日本大震災後の復興プロセス

①避難プロセス

②すまいの変化と地域的組織

③行政や外部支援

４．研究成果

本研究の成果を、上の項目に即して示す。

(1)「災害文化」に関する理論的検討

本項目については、おもに震災前後に出版された文献にもとづいて研究を行った。中心的には、2016 年刊行の橋本裕之・林勲男（編）『災害文化の継承と創造』所収の「人類学における災害研究：これまでとこれから」で論じた。そこでは、「「文化」が他の諸要素との関連のなかで初めて意味をもつ（それだけ単独で存在しうるモノのようなものではない）という従来の文化人類学的な姿勢と、あえて「文化」という言葉を使って議論をするというある種の「戦略的本質主義」との間で、バランスを取ることが必要になる」と論じた。

（2）昭和三陸地震から東日本大震災までの地域の変化

①過去の災害の記憶・記録の維持

②地域の変容

これらの項目については、予定していた大船渡市街地での調査が十分にできず、綾里地

区のみで調査を行った。綾里地区は 11 部落からなり、そのうち 8 つの部落が海に面して小さな漁港をもっており、今回の津波でも多かれ少なかれ被害を受けている。本プロジェクトでは、本務校の長期休暇の時期を利用して、その 8 つのうちの 4 つで調査を行った。

その結果、昭和三陸津波後の高所移転の仕方とその後の経緯（自力で高台に上がったり、高台から低地に下りてきたり）の多様性があることが明らかになった。

加えて、調査では、各部落の組織や生業の変化についてもあとづけることができた。これらの調査結果の一部はすでに論文や口頭発表にしているが、今後も公表していく予定である。

（3）東日本大震災後の復興プロセス

①避難プロセス

②すまいの変化と地域的組織

③行政や外部支援

これらの項目のうち特に①と②に力を入れて調査を行った。綾里地区では 2015 年中に集団移転と公営住宅への移転が行われ、仮設住宅が撤去された。このような自宅の流失から何度もの移転を経験した方々にそれぞれの時期にお話を伺い、そして全員の方が仮設住宅を離れることができた後の 2016 年 3 月に長時間の聞き取りを行うことができた。

その結果、想定されているような「避難所→仮設→再建」という枠組みには当てはまらない多様なルートが存在していることが明らかになった。これについては今後公表する予定である。

加えて、仮設後にどのような住まいを選択するかについては、もともと土地をもっていたか（あるいは津波後に購入可能であったか）や、家族の動向（跡継ぎや障がい等の個別の事情）、さらに家屋の価格などやはり複雑な要因が絡み合っていることが明らかになった。

以上を一言で言えば、本研究においては「津波てんでんこ」に代表されるような「災害文化」と言われているものの内実を、事例に即して詳細に明らかにできたといえる。

人類学の分野では「文化」と呼ばれるものの曖昧さ、複雑さに関しては半ば常識になっているが、そこで実際に何が起き、様々な要素がどう関わり合っているかを明らかにした点が、本研究の成果であるといえよう。

ただし、調査結果についてはまだすべてを公表し得たわけではないので、今後も継続して論文執筆に励みたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　８　件）

① Kimura, Shuhei 2016 When a seawall is visible: Infrastructure and obstruction in post-tsunami reconstruction in Japan. *Science as Culture* 25(1): 23-43. 査読有

② Kimura, Shuhei 2015 Visualizing with "soft light": A reflection on public anthropology and 3/11. Japanese Review of Cultural Anthropology 15: 127-140.　査読有

③ 木村周平、2015「異なる世界（観）、呼びかけと公共性に関する試論」『歴史人類』43: 48-66.　査読なし

④ 木村周平、2014「人類学は震災とどう関わり、何を記していくべきか」『季刊民族学』148:68-72.　査読なし

⑤ 饗庭伸・合木純治・鈴木翔大・寺澤草太・丸茂友紀・池田浩敬・木村周平、2013「大船渡市綾里地区の復興まちづくり計画」『季刊まちづくり』39:32-47.　査読なし

⑥ 池田浩敬・饗庭伸・木村周平・他 5 名、2013「東日本大震災における避難行動・避難生活に関する教訓継承の取組：岩手県大船渡市綾里地区での事例」『地域安全学会発表会梗概集』31：67-70.　査読なし

⑦ 池田浩敬・饗庭伸・木村周平・他 3 名 2013「大船渡市三陸町綾里地区における復興まちづくり計画の作成プロセスと防災面での成果」『地域安全学会東日本大震災特別論文集』2: 61-64.　査読なし

⑧ 木村周平、2013 「津波災害復興における社会秩序の再編：ある高所移転を事例に」『文化人類学』78(1): 57-80。査読有

〔学会発表〕（計　６　件）

① 木村周平「地域の組織や生業に組み込まれた災害対応：綾里ではふたつの津波の間に何が起きたか」2015 年 日本災害復興学会　分科会「昭和三陸大津波と東日本大震災　災害と復興の時空間を探る」於：専修大学（東京都千代田区）。2015.9.26

② 木村周平「「終わり」に抗して：「復興」を作り上げる複数の時間性」第 49 回日本文化人類学会研究大会（分科会「一時性の人類学」）於：大阪国際交流センター（大阪府大阪市）。2015.5.31

③ Kimura, Shuhei Visualizing culture?: A collaborative approach to public anthropology after March 11. Panel “Practicing a public anthropology in communities devastated by the East Japan Disaster,” IUAES 2014 幕張メッセ（千葉県千葉市）2014.5.16

④ Kimura, Shuhei Reconstruction of the Risky Landscape in Post-tsunami Japan: Visions, Risks, Infrastructure, Annual Meeting of American Anthropological Association (Chicago, USA) 2013.11.24

⑤ Kimura, Shuhei "Science and Society in Japan: Rebuilding trust after Fukushima Daiichi disaster", ICAS8 (Macau, China). 2013.6.24

⑥ 木村周平「分科会「『生』の復興に向けて」概要」日本文化人類学会研究大会、於：慶應大学（東京都港区）2013.6.8

〔図書〕（計　８　件）

① 木村周平（刊行決定）「津波とともに生きる人びと：東日本大震災被災地でのフィールドワークから」伊藤純郎・山澤学（編）『破壊と再生の歴史・人類学』筑波大学出版会。
② 木村周平、2016「人類学における災害研究：これまでとこれから」橋本裕之・林勲男（編）『災害文化の継承と創造』臨川書店、pp.29-43。
③ 清水展、木村周平（編）2015『新しい人間、新しい社会：復興の物語を再創造する』（災害対応の地域研究シリーズ第 5 巻）京都大学学術出版会、402 頁。
④ 木村周平、杉戸信彦、柄谷友香（編）2014『災害フィールドワーク論』古今書院、212 頁。
⑤ 東賢太朗、市野澤潤平、木村周平、飯田卓（編）2014『リスクの人類学：不確実な世界を生きる』世界思想社、346 頁。
⑥ 木村周平、2014「災害の公共性」山下晋司（編）『公共人類学』東京大学出版会、pp.171-185。
⑦ 木村周平、2014「コラム　原発があらわにしたモラル・アポリア」高橋良輔・大庭弘継（編）『国際政治のモラル・アポリア』ナカニシヤ出版、pp.99-100.
⑧ Kimura, Shuhei 2014 Roads. In Daisuke Naito, Ryan Sayre, Heather Swanson, Satsuki Takahashi (eds.) *To See Once More the Stars: Living in a Post-Fukushima World*, Santa Cruz: New Pacific Press, pp.28-30.

６．研究組織

(1)研究代表者

木村　周平（KIMURA, Shuhei）
筑波大学・人文社会系・助教
研究者番号：10512246